

機関番号：34504
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19520279
 研究課題名（和文） 18世紀フランスのリベルタン文学と版画の研究
 研究課題名（英文） Studies in the Libertine Literature and (Erotica) Illustrations of Eighteen-Century France

研究代表者
 関谷 一彦（SEKITANI KAZUHIKO）
 関西学院大学・法学部・教授
 研究者番号：40288999

研究成果の概要（和文）：リベルタン文学の中で最も重要と思われる『女哲学者テレーズ』の翻訳を人文書院から出版し、同書の「訳者解説」でリベルタン小説およびリベルタン版画について詳細に説明した。また、リベルタン小説はポルノ小説と混同されがちだが、両者は似て非なるものであることを明らかにした。『女哲学者テレーズ』を始めとするリベルタン小説やこれまであまり研究されてこなかったリベルタン版画を取り上げて、その意味と役割についても解説した。そして18世紀フランスにおいて、フランス革命に向かう民衆の意識変革にリベルタン文学が果たした役割の重要性を読者に問題提起した。

研究成果の概要（英文）：I published the translation of *Thérèse philosophe* with Jinbunshoin. *Thérèse philosophe* is one of the most important among the libertine literature in eighteenth century in France. I gave a detailed account of the libertine novel and also of the libertine illustrations in “The explanation of translator” of this book. As we tend to confuse the libertine novel with the pornographic one, I showed the difference between them. I explained carefully the meaning and the role about the libertine novel, like *Thérèse philosophe*, and also about the libertine illustrations that have rarely been studied. In the second half of the eighteenth century, French people were heading toward the French Revolution. I pointed out the important role of the libertine literature that caused people to reform their consciousness in such era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：仏文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：18世紀フランス文学、リベルタン文学、リベルタン版画、エロティシズム、春画、女哲学者テレーズ

1. 研究開始当初の背景

18世紀フランス文学研究の中で、これ

までリベルタン文学やリベルタン版画はあまり注目されてこなかった。その理由は猥褻な文学として、研究対象から排除されてきたからである。しかし性についての社会意識の変革に伴って、フランスではプレイヤッド版の *Romanciers libertins du XVIIIe siècle* (『18 世紀のリベルタン小説家たち』) が出版されてようやく学問対象として認知され、また日本でも春画の研究がアカデミックな研究対象として取り上げられるようになり、研究環境が変化してきた。こうした背景を踏まえて、リベルタン文学とはどのようなものなのか、ポルノ作品とどのような違いがあるのか、リベルタン小説やリベルタン版画は当時どのような役割を果たしたのか、こうしたことを明らかにしたいと考えたのが本研究の動機である。

2. 研究の目的

こうした背景と動機を踏まえ、以下の点を研究の目的とした。

(1) 日本であまり紹介されていないリベルタン文学をまずは紹介することを目指した。18 世紀のリベルタン文学の中で中核的な役割を果たしたのが『女哲学者テレーズ』(1748) である。そのためにこの作品を日本語に翻訳することから始めた。この作品には哲学的な議論と性的行為が交互に出てくる。その哲学的な議論について分析を行い、先行するどのような哲学がこの作品に流れ込んでいるのか、また後に続くどのような作品に『女哲学者テレーズ』が影響を与えているのかを検討して、この作品の当時の位置および役割りを明らかにしようとした。

(2) リベルタン小説にはさまざまな版画が挿入されていることが多いが、こうし

た版画研究はほとんど手つかずの学問領域であったため、版画を紹介するとともに分析することを目的とした。とりわけ、『女哲学者テレーズ』はさまざまな版に異なった多くの版画が残されているので、版画研究には格好の素材である。まずはどのような版があるのか、版画の枚数やその内容、テキストとの関係、版画の質、特徴などを仔細に調べることから始めて、その比較を行なおうとした。

(3) また、フランス 18 世紀の版画と江戸時代の日本の版画とを比較することから、日本とフランスの文化比較も当初の目的とした。18 世紀の日本は鎖国状態であったので、フランスとは交渉はなかったが、同じころにフランスではリベルタン版画、日本では春画が多く摺られた。両者を比較することで、それぞれの特徴をより明らかにし、また差異だけでなく、共通するものが見出せないか検討することを目的とした。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために以下のような方法で研究を行なった。

(1) 『女哲学者テレーズ』の諸版を調査し、入手可能な版はすべて手に入れ、入手不可能な版については、図書館に足を運んで調査した。とりわけ夏休みを利用して、フランス国立図書館やリヨン市立図書館などで資料の収集にあたった。とくにフランス国立図書館には当時の発禁本が集められた Enfer (地獄) の部屋が過去にあり (Richelieu 通りにあるフランス国立図書館)、現在でも salle Y という部屋 (François-Mitterrand と呼ばれている現在のフランス国立図書館) にこうした貴重本が集められていて、一挙に目にするこ

ができる利点があった。また、翻訳は時間がかかるために毎日のノルマを決めて、規則的に訳することを心がけた。翻訳の際に生じた疑問点は、休みを利用して渡仏した際に、主にリヨン在住の18世紀研究者と議論をしてその解決にあたった。

(2) 版画に関しても集めうるものはすべて収集するという方針で臨んだ。その中でもドイツの出版社が出している *Ars Erotica* に、『女哲学者テレーズ』の主要な版の挿絵が含まれていることがわかり、大いに役立った。しかし、それ以外のもはフランス国立図書館に通って調査をした。版画は実際に自分の目で見てみないことにはその質を評価することは難しい。そのために現地調査が欠かせなかった。さまざまな版の比較研究から、版画としては Borel 作で Elluin が彫った Enfer406・407 が最高の質であることがわかった。またその特徴を検討すると、本来隠すべき性器が鑑賞者により見えるように、つまり見せるような描き方がなされていて、リベルタン版画としての特徴をよく示しており、またそこからは性描写のもつ役割である現世志向をよく表わしていることがわかった。時代を映し出す版画の検討は、今後さらなる研究を必要とする重要な領域である。

(3) フランスの版画と日本の春画の比較研究はあまり順調に進んだとは言えない。フランスの版画の収集、日本の春画の収集はある程度行なうことができたが、そこからの検討が進んでいないからだ。今後は比較分析に研究を進めたいと考えている。

4. 研究成果

(1) 2009年度および最終年度の2010年度にこれまでの研究のまとめを行なった。まず2009年度は、「18世紀フランスのリベル

タン小説：『哲学者テレーズ』のタイトルで論文を発表した。これまでに集めた資料から『テレーズ』の諸版を比較検討し、またテキストに散見される唯物論哲学の系譜を当時の文脈から考えようとしたものである。とくに初版本の問題、作者の問題、テキストにみられる当時の思想の系譜、また『テレーズ』とサドの『閨房哲学』のテキストとの関係、さらにはリベルタン小説が18世紀後半にどのような役割を果たしたのか、などを検討した。

2010年度には「『哲学者テレーズ』におけるリベルタン版画」のタイトルで論文を発表した。この中では『哲学者テレーズ』のさまざまな版に見られる版画を取り上げて比較検討した。リベルタン版画は日本の春画同様に1990年頃までは猥褻であるとしてあまり評価されてこなかったが、現在ではその価値が見直されつつある。フランスではこの領域の研究は今なお未開拓で、あまり多くの研究があるとは言えない。そこでリベルタン小説としてもっとも重要な作品である『哲学者テレーズ』に含まれる挿絵を取り上げて、主にフランス国立図書館所蔵のEnfer 402、404、406・407を比較検討した。挿絵の質、芸術的価値、『哲学者テレーズ』における挿絵の特徴、またその役割などを分析した。

さらに、『女哲学者テレーズ』としてこの作品の翻訳を人文書院から出版した。この作品は先にも述べたようにリベルタン小説の中核であり、18世紀フランスでもよく読まれた。そのためまずは作品の全容を紹介して、リベルタン文学を読者に味わってもらいたいというのが翻訳の目的であ

る。とくにリベルタン小説をポルノ小説とみなす視点に問題提起をしたかった。またこの翻訳の後ろに「訳者解説」として約60頁の解説を付した。とりわけリベルタン文学およびリベルタン版画が、18世紀フランス社会で果たした役割について、当時の社会に与えたインパクトの重要性から単なる猥褻文学ではなくフランス革命にいたる社会批判の役割を担っていたのではないかと問題提起をした。

(2) 得られた成果としては、国内では一般の読者にリベルタン小説がどのようなものであるかを『女哲学者テレーズ』の翻訳出版によって示すことができた。とくに翻訳は一般の読者を想定して平易な表現を心がけ、またこれまでは抄訳や一部省略があったものを、オリジナル版のEnfer 403を底本にすることによって原文に忠実に訳することを心がけた。また、リベルタン版画の挿絵についてもおそらくこれまであまり詳しい紹介がなかったので、一般読者のみならず研究者にも紹介ができたと考えている。この翻訳は猥褻なテキストや挿絵を含んでいるにもかかわらず、「日本図書館協会」の選定図書に選ばれた。

海外、とくにフランスの国立図書館には『女哲学者テレーズ』の翻訳を送った。しかしその内容は日本語で書かれているので、多くの研究者の目に触れることはないと考えられる。そこで『女哲学者テレーズ』の中のとりわけリベルタン版画についての研究をフランス語に翻訳するようにフランス人研究者から言われており、今後の課題としたい。

(3) 今後の展望としては、先にも書いた

ように、フランスではリベルタン版画の研究はあまり進んでいるとは言えないので、『女哲学者テレーズ』の版画についての研究をフランス語で発表して、この領域の研究に一石を投じたい。

また、今回の研究を通して新たな問題点も明らかになってきた。それは、猥褻であるという理由で研究対象から排除されてきたリベルタン文学やリベルタン版画が18世紀フランス社会で具体的にどのようなように読まれ、受容され、意識変革を促し、社会を変えていったのかという問題である。ロバート・ダーントンの研究によって、リベルタン文学が18世紀のベストセラーの一つであったことが明らかになり、フランス革命との結びつきも指摘されている。これまであまり注目されてこなかったリベルタン文学をさらに翻訳紹介し、18世紀フランス社会で果たした役割を明らかにしていきたい。

また今回やり残した日本の江戸時代の春画との比較研究にも着手して、その成果を公表したいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 関谷一彦、「18世紀フランスのリベルタン小説：『哲学者テレーズ』」、『言語と文化』13号、査読無、関西学院大学言語教育研究センター、125-145、2010.
- ② 関谷一彦、『哲学者テレーズ』におけるリベルタン版画、外国語外国文化研究15号、査読無、関西学院大学法学部、125-151、2010.

〔図書〕（計1件）

- ① 関谷一彦、女哲学者テレーズ、人文書院、
235頁、2010.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関谷 一彦 (SEKITANI KAZUHIKO)

関西学院大学・法学部・教授

研究者番号：40288999

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：